

末黒野

すぐるの

8月号
(通巻924号)



鳶の笛

森清堯

街道の軒先巡り初燕
いささかの不安に揺れて花木五倍子
満天星の花をふるはせ谷の風
末広に川より湾へ花筏
春耕の二人を囃し鳶の笛
山肌を飛び火のやうやつつじの緋
見霽かす里のひと色桃の花
八十八夜萌黄の起伏続く丘
葉桜や青帯結ぶ道着の子
月明かりあまさず捉へ水木咲く
湧水のふくるる水面柿若葉
若楓日の斑の揺るる法の池

金色の鯉

岡野里子

湧水のひかり一条座禅草
草庵の袖垣雨の花蘇枋
羽音に匂ひ零せり藤の花
金色の鯉寄る中洲若緑
花楓磴の手摺りの竹青し
日照り雨へ盃を掲げて花水木
水槽は二尺の宇宙熱帯魚
石室の観音堂や新樹光
溪風を吸うて百余の五月鯉
岩肌を滑る光りや苔清水
寺清水池の真鯉の良う太り
はけ径の噴井饒舌修司の忌

瑞声

五月鯉

黒滝志麻子

(顧問)

五月来る潮目の変はり岬の灯
彫り竜の深き木目や影涼し
アルプスの山へ尾を打つ五月鯉
沢音へ声を高めり瑠璃鷄
沖を行く巨船卵波の秀に乗りて
百畳にひとり座禅夏蛙
ふた筋の川合ふところ行々子
青蜥蜴全身耳にして走る

甲矢集

末黒野旗

石黒興平

一憂を忘れてゐたる朝寝かな
春騒雨浮棧橋を叩く音
惜春や大会統ぶる末黒野旗
歴代の主宰の揮毫春ごころ
竜天に登り受賞者真顔なる
受賞者の栄ゆるや春の金屏風
高砂の謡朗朗春愉し
初夏の風牛の鼻面なでゆけり
谷間の静寂を深め遠郭公
一湾の船の往き来や二重虹

初夏

太田良一

裏山のやまびこ増ゆる立夏かな
鰻頭笠の走る大路や夏来る
浮彫のやぐらの仏滴れる
夏蝶の休む日時計曇り空
森深き裏街道や蟻の列
貝殻の光る砂浜聖五月
初夏の富士を遠くに棚田かな
夕立や走り抜けたる国境
白波に海の子となる素足かな
薫風や石が一つの屋敷神

紙の花

小田嶋野笛

湯立獅子亀の口より神の水
嘘をつくことの疲れや万愚節
入園の窓や五色の紙の花
踏青や扁平足は父ゆづり
桜糞土の湿りへ降りにけり
闇に鳴く子猫の瞳エメラルド
乗り遅るるエイトビートや春落葉
鼻眼鏡外れ落ちたり目借時
春眠を呼ぶ一粒や糖衣錠
倦いてゐるマクラメ編みや菜種梅雨

端午

森清信子

春くや桜の影は淡きまま
ふんはりと踏む花屑や酔心地
小綬鶏に囀され通しにぎり飯
青空へ長き船笛リラの花
昭和の日雨の大樹の青あをと
初めての靴は空色端午なり
丘陵の風に煽られえごの花
夕映えの茅花流しや発つ機影
新緑や学僧の顔引き締まり
青葉潮分け大漁の帰港なり

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



不如帰

長尾タイ

不如帰夫の表札古りしまま
ふらここや長き余生の宙を蹴る
鼓草白線残る草野球
青葉風赤き頭巾の六地藏
小綬鶏の啄む山路日の斑降る
揚げ雲雀一朵の雲に声あづけ
古里や残雪仰ぐ露天風呂

桜鯛 高木邦雄

虹二重 池谷鹿次

流鶯の声の訝や仙の径
水底のアラビヤ文字や蝌蚪の影
灘名酒添ふる御膳や桜鯛
白牡丹音なく散るや朝の園
麦秋や故なき憂さの去り難く
ブランチをオープンカフェに薔薇の園
筑波嶺や眼下黄金の麦の秋

鮮明なる縞の模様の鯉かな
城垣は崩れ夏草勢ひけり
禁猟区の湖は楽園残る鴨
海峡に架かる吊橋虹二重
鎮守社へ睨一本下萌ゆる
ふるさとの話のはづみ冷し酒
遮断機のなかなか開かず大夕焼

花巡り 池乗恵美子

立夏 大川暉美

見とれゐる自惚鏡四月馬鹿
高々と両家の家紋祝風
鳥帰る戦なき空風上々
もどり道の心地よきかな花巡り
武蔵野の風ゆきわたる花洛かな
花の名を問へば和歌もて紫荊
翠巒の木々の勢や水の声

春の田の畦に立て掛け猫車
故郷の木の香木の色春深む
菜を洗ふ水の煌めく立夏かな
ぼうたんの一花ゆるりと崩れけり
広庭に影翻る鯉のぼり
今帰仁の城壁高し風薫る
三線の音色に酔ひぬ夏の宵

五月 今村千年

金銀花 岡田史女

きらきらとみどり煌めく五月かな
薔薇散りて気の衰ふる狭庭かな
産土の土のかをりや青山椒
混み合へる小町通りの薄暑かな
麦秋や書架に未読の波郷句集
山一つ越えれば母郷栗の花
鱧皮の何かうれしき夕餉かな

銀座線三番出口風光る
おほよその事は手抜きや蛙鳴く
霞ヶ関通りや赤き栃の花
まだ湿りある木道や金銀花
黄菖蒲のびつしり池面せばめけり
老鶯や棚田の水のひかりあふ
空の青写す湖面や新樹光

青炎集 森清堯選



横浜 秋山 文子

路味噌を食ぶや三年若返る
よちよちの胸へ飛び込み青き踏む

麗かや大地も山も色付きて
手を上げて見渡す左右一年生
折り鶴の千に届かず朧の夜
店頭に香りを放ち三葉芹

町田 伴 秋草

初蝶の風の合間の飛来かな
掌の運命線や啄木忘

園児より遅き歩みや春うらら
予定なき黄金週間書にも飽き
自家用に家族総出の茶摘かな
鉄棒に泣く子笑ふ子風薫る

葉山 伊藤 美緒

潮騒の間合ひのゆたに春行けり

宮屋根を渡る海風鯉幟
葉桜や顔まちまちの六地藏
魚河岸に青き目の客夏来る
若葉映ゆ庭に隣家に遠山に
図書館に仰ぐ高窓新樹光

横浜 新倉 ゆき江

満腹を脳へ伝へて目借時
八重桜鉛のごとく重き脚
追はれつつ見れば我家の巣蜂かな
がさごそとひとつとどうぞと柏餅
筍を掘る三世代泥まみれ
赤信号の点滅急や花は葉に

三鷹 小林 清彦

自負心のあくびしてをり春の昼
砂漠化の進む世情や黄砂降る
石鹼玉光捕ふる刹那とも
雀蜂羽音の威嚇ありありと
兄弟であること暫し蝌蚪の群れ
菖蒲湯に遊ぶ子どもの無邪気かな

大網白星 岡井 マスミ

春岬飛び交ふものに空青く
沈みゆく餌に影ちらり春目高
ぶうんときて耳朶痒し夏隣
江ノ電待つ稲村ヶ崎風薫る
イーゼルは桜木の枝風薫る
卯波晴仁右衛門島主留守模様

横浜 平木 三恵子

ものの芽や吹き出す命まぶしくて
蛇穴を出づや威嚇の黒い猫
選挙カー桜吹雪の中を行く
水に泣く受洗の嬰や復活祭
春愁や午後の茶店のカプチーノ
蜆汁五臓六腑に浸むる朝

横浜 布施 由岐子

単線の車両大揺れ山笑ふ
げんげんの田んぼの二枚風甘き
残雪の谷間抜くるや神の庭
雪山の春や蹴り込む靴の音
我まさに遮光器土偶風光る
這松の下の番やうらけし

横浜 山口 登

滞船の影溶けゆけり春夕焼
憂きことを覆ひ尽くせり春の波
点々と林地を灯す海老根かな
独り居やレシピ片手の木の芽和
読み止しを積ん読に足し竹の秋
里山の穂麦の青きはざまかな

横浜 谷 貝 美 世

とぐろ捲く根方の幹や藤の花
鷺一羽黄砂の風に羽ひろげ
三つ編みの若き園丁風光る
池の面へ傾く松や蛙鳴く
花散るや亭々の樹の枝の張り
石楠花や雑木林のひとつとこ

耕 土 集

岡野 里子 選

つつじ照る写生する子の赤帽子
寛げる林泉の亭樹や匂鳥
霊園の初音や心洗はれて
火を回す大道芸や薔薇まつり
ジャスミンに憩ふ連休予定なく
横 津野 桂子

鯉幟の鱗は子らの手形かな
老農の見回る夕や田水張り
母の日や写真の妣に近づいて
つまらぬといふ晩年や夏めけり
ぐつたりのエアロビックス玉の汗
横 久島しんの

救急車の出合ふ三叉路暑き夜
こどもの日見上ぐる子へのぼち袋
新茶膝へ試飲の余韻バスに乗せ
米糠を添へて到来真竹の子
キャベツ穫る夫婦に朝日カーラジオ
横 佐藤 勝代

チューリップスタジアムより上がる声
鶯の森の奥処を明かるうす
鯉幟帷子川を登るかに
鯉幟の群泳の中息子逝く
ベランダに立てし彼の日や鯉幟
横 吉田千恵子

渋滞の真つ只中や子供の日
介護車の立寄る寺や富貴草
一頻り昔話や豆の飯
青鷺の一步を待ちて小半刻
葛切りや言はず語らず喜寺傘寿
横 喜田 君江

出来立ての友と手を取り一年生
山笑ふパッチワークの色合せ
透き通る器に盛りて冷奴
人の世の塩気甘気や水羊羹
夏の夕井戸端会議長びけり
横 森 由佳

初蝶の庇に寄り来二度三度
網焼きの栄螺ゆるりと蓋閉ぢて
木瓜の花突き食む鳥や枝移り
万太郎忌先ずは浅草語りけり
鯉幟風に向ひて三千尾
横 佐々木澄子

親ばかり夢中になりて苺摘む
青空や石楠花の庭苔むして
採れたてを焼き蚕豆や生一本
お茶請けと茶器にこだはる新茶かな
古池の変らぬ風情夏來たる
狭 谷安喜美子

初夏や保冷で送るチョコレート
新茶の香満ちて煙草を吸い捲む
暗渠へと流るる海月圧し合ひて
公園にベンチ一脚花は葉に
喜寿の腰ぐぐと掘り上ぐ真竹の子
横 佐々木未完

遠足や子ら駆け回る古戦場
百種類ほど植うる早苗や農学部
徳利に鈴蘭挿して休肝日
イーゼルを立てて夏野に一日かな
山小屋の火は白樺の丸太かな
宮 京極 久也

雲流るる空の深さや春深む
のどかさの昼のベンチや雲白き
春空に一つ雲浮く広場かな
よういんどんと子の競ふ声春の昼
春風に髪ふはふはと遊歩道
横 堺 昌子

柏餅三種の餡や子供会
ブラウスの舟の刺繍や風薫る
豌豆や十粒並びて隙間なし
古都の街茶店に並ぶラムネ瓶
明易や眠れぬままに介護の夜
横 梅野 宏子

花吹雪姥三人の昼下り
帽子追ふ浮棧橋や春疾風
青年の決意新たや風光る
バスめがけダッシュの乙女山笑ふ
喫茶店の大きな窓や春落葉
横 杉山くみ子

おのおのに染むる個性や雑木の芽
若葉風笑ひ止まらぬ句座帰り
しよんぼりと風待つ朝鯉のぼり
春く庭やガーベラは眠るやう
伽羅路を焦がす厨の苦みかな
横 白居 澄子

華やげる山の斜面や濃山吹
藤の花ひと日の風の荒あらと
マンシヨンの垣根染めたる躑躅かな
春深しネモフィラの青広びると
ふる里は千葉と砂吐く浅蜷かな
横 鈴木千恵子